

金賞 小学生の部

心のお守り

浜松市立白脇小学校 四年

大石 梨湖

私はバトントワリングを習っています。みんな学校や学年がちがうけど、やさしい人たちがたくさんいます。そんなみんなに私はいつも助けられています。

こまっている人を見かけたとき、助ける方法はたくさんあります。私は人をすぐえる一番の力になる方法は「言葉」だと思います。その中でも「大丈夫」という言葉に私はたくさんすくわれてきました。

私が一年生のころの話です。人見知りの私は自分から声をかけるのが苦手で、だれか声をかけてくれないかなと心の中で思っ自分から仲良くなることをにげていました。でも、ある日先生にふりつけをまちがえていることを注意されてしまい、私はこまってしまいました。そんなとき、近くにいた

子が「大丈夫だよ。次は出来る。いっしょにれんしゅうしよう。」とはげまして私が出来るようになるまで何度もいっしょにれんしゅうしてくれたのです。すぐはすくなくドキドキしたけれど、「大丈夫」という言葉を思い出しおどつてみるとまちがえずにおどることが出来ました。とっても安心しました。友達も自分のことのようによろこんでくれてうれしかったです。このことを私はわすれることができません。今では、自分から声をかけることやおたがいにおどりを教えあったりする時間もふえてすっかり仲良くなりました。「大丈夫」という言葉は今も私の心のお守りとなっています。

今年になって新しく三年生が入りました。私はその子を見ていたら、昔のはずかしがっていた自分のことを思い出しました。そこでお姉さんたちが私にしてくれたように私もなろうと思ひ、私から「大丈夫」という言葉をかけていくようにしました。いつも声をかけてもらうばかりの私が「大丈夫」という言葉をかけているすがたをみたお姉さんたちはおどろいていましたが、私もお姉さんに近づけたような気がしてうれしくなりました。私の「大丈夫」の一言で、きんちょうしていた顔が安心した顔になってくれることがとってもうれしです。それだけでなく、「ありがとう」の言葉とにっこりえ顔が返ってきます。私は「ありがとう」という言葉は言う

人も言われた人もどちらもうれしくなるすてきな言葉だと思いました。

親切とは、思いやりをもって人のために行動することです。たった一言「大丈夫」と声をかけることですくわれることがあります。これからも自分ができることは何かを考え、こまっ



私の中の感情

浜松市立富塚西小学校 六年

高野 愛梨

私は、あの時の友達に感謝を伝えたい。

三年生の時の冬、私は友達と話をしている間に教科書を忘れてきてしまったことを思いだした。

「大変！教科書、忘れちゃった。ちょっと取りにもどるから、先に行つてて。」

私は返事も聞かずに走った。

家に着くと車はあった。ほっとしてドアを開けようとした。

「えっそうでしょ」

「・・・しまつてる」

冷やあせをかいた。頭が真っ白になった。どうやら母はさんぽのようだ。しかたがない、先生にあやまるしかないか。そう思い、また走りだした。友達の所までいけたら学校には間に合うかなと思つた時だった。視界がにじんだ。「せっかく走つたのに」という思いがあふれた。でも私は涙を必死におさえ、走った。



金賞

さっき、教科書を忘れているのを思いだした所まできた。

「えっなんで・・・。」

そこで目にしたのは、一緒に登校していた友達だった。私は熱いなか胸で暴れているような気がした。そして「ありがとう」という声のかわりに温かい涙がほほを伝った。どんな映画を見ても、ひどいことをいわれても泣かなかった私。ただ友達が待っていてくれただけで泣いてしまった。いや、「ただ」ではない。きつととても寒かっただろう。そう、とても寒いのに心は温かいのはなぜだろう。

「涙なんて見せたくなかった」「うれしい」「お母さんなんて」「悲しい」「ありがとう」「どうして」「時間は」「はやく行かなくては」「ありがとう、ありがとう」いろいろな思いがうずまく。でも、どうしても「ありがとう」は言えなかった。

私は、感情を出すことも大切だと感じた。そして言葉にすること。私はあのとき、お礼が言えてなかったと思う。だから今、伝えたい。この思い、届くといいな。

「ありがとう。」



「うけつがれる親切ヒーロー」

浜松市立豊岡小学校 四年

山田 花凜

わたしは、一年生の時、近所に同級生の男の子と女の子がいて、そのうえ、六年生のとても親切なお姉さんもいたので、心強かったです。けれども、今年入学してきた一年生のまほちゃん、近所に同級生のいない女の子なので、不安そうでかわいそうだなと思いました。近所の上級生では、四年生のわたしが一番年上でした。わたしは、まほちゃんが、登校中に不安にならないよう、ちょっとしたでも安心させようと、手をつないで登校することにしました。

五月初じめん、そんなまほちゃんが、登校の中から、友達と行けるようになり、わたしは安心しました。

ある日、まほちゃんは、いつものように友達を見つけ、かけよった時、ころんで、けがをして泣いてしまいました。

わたしはそれを見て一年生の時の出来事を思い出しました。一年生だったわたしは、いつものように友達と歩いていると、石につまずきころんでしまいました。その時、六年生のお姉さ

んが、

「大じょうぶ？待って今、ばんそうこう出すから。」

といい、ランドセルから、ばんそうこうを出し、はってくれました。わたしは安心して、学校に行くことができました。わたしは、かつこいい！いつかそうになりたい！と思いました。そして、その日から、ばんそうこうをランドセルに入れるようになりました。

まほちゃんが泣いています！まほちゃんの友達もあわてています！まわりの上級生の人たちはこまっています。わたしはそれにいち早く気づき、かけよって、あの時の言葉をかけました。「大じょうぶ？ばんそうこうはってあげるね！」

ランドセルからばんそうこうを出し、はりました。まほちゃんは安心して、

「ありがとう！もう友達と行けるよ。」

といい、いつも通り登校しました。

わたしはお姉さんを見て、学んだ親切をまほちゃんにもできました。

わたしは、まほちゃんがお姉さんになった時、同じように、下級生に、親切にできる子になってほしいと思います。

みんなが親切ヒーローになって温かい社会になってほしいです。



金賞

金賞 中学生の部

「上手な親切をするために」

湖西市立鷺津中学校 三年

加園 琥汰朗

親切とは何か。このように考えさせられる出来事が今年の修学旅行の時にありました。

修学旅行の二日目、私はグループ活動で班の皆と京都の市バスに乗っていました。私たちにとって、市バスは乗ったことの無い物、いわばアウェーといった所でした。人の出入りが多く、その中でも高齢の方が乗る回数の方が多かったので、「後から譲るために立つのも面倒だ」と考え、席が空いても座らず、そのまま立っていることにしました。私たちは、この行動が親切だと思っていました。しかし、後から乗ってきたおじいさんに、「席が空いているのに立っていると、他の人が降りようとする時に邪魔になるし、危ないので、空いていたらとりあえず座って、私のような老人が来たら、席を譲ってあげてください。その方

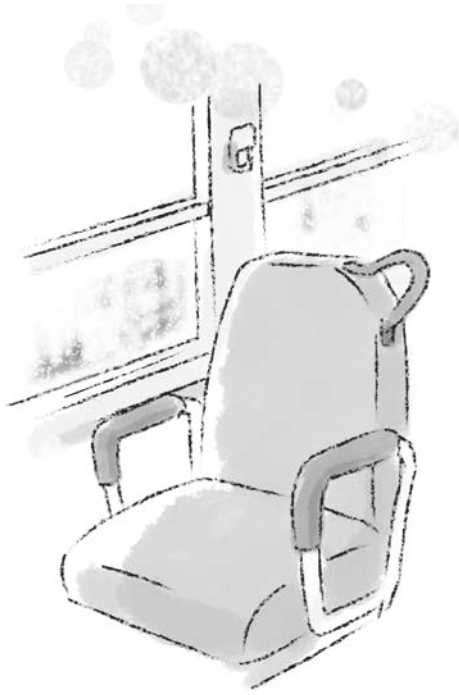
が私としても安心できます。」

と優しくさとされてしまいました。これで私たちは気が付きました。私たちが親切だと思っていた行動が、却って迷惑になっていたのではないかと。それ以来、私は「上手に親切なことをするにはどうすればいいか」と考えるようになりました。

まず、私たちがこのような間違いをしてしまった原因の一つとして、普段そのようなことを体験したことがないからという点があるのではないかと考えましたが、このような場面にあることは滅多に無いので、どうすればいいか考えていた所、幼稚園のボランティアの活動があることを知り、そこから何かヒントを得られるのではないかと思い、その活動に応募することになりました。ボランティアは一日だけでしたが、その幼稚園の子ども達がとても元気だったこともあり、その日はとても疲れしました。その代わり、私は「上手に親切なことをする」ためのヒントになるような経験ができました。その一つをあげると、私が幼稚園の教室にいる時、いつもと違って、中学三年生のお兄さんが部屋の中にいるので、気持ちが高ぶって、部屋の中を走り回る子が数人いたので、そのような場合だと子どもたちの様子を注意深く見て、ケガをしないようにする必要がありました。このような行動を、「困っている人がいないか、周りをよく観察する。」という点で親切に生かせるのではないかと考えました。

そして、もう一つ「上手な親切」に必要なことがあると考えました。それは「タイミング」です。子ども達との間で、何かトラブルがあっても、子ども達だけで解決しそうな時に、先生はよく見守っていました。このようなことから、困っている人が自力で困難を乗り越えることができそうな時は、そつと見守る方が良いと学んだからです。

私は、修学旅行での経験や、ボランティア活動を通して、「親切と迷惑は紙一重」なのではないかと考えました。「親切と感じることは人それぞれ」だということを理解すれば、多様性の社会である今の世界が、もっと優しくなるものではないかと思いました。



親切の形

静岡市立長田西中学校 二年

鈴木 花奈

「相手の立場になって考えること。」「相手の心の形を考えること。」私はこのことを普段から大切にしている。

まだ小学生だったある日、学校で掃き掃除をしていると、「ちりとり片付けておいたよ。」という言葉が聞こえた。その時、二つの気持ちが頭に浮かんだ。「きつと友人は親切のつもりで片付けてくれたんだ。」と「まだ私ゴミ入れてないのになんで勝手に片付けちゃうんだろう。」だ。その友人は授業で習ったようにみんなのために思って行動したのに、私はもやもやとした気持ちになった。

その時はまだわからなかったけど、今、中学生になってやつともやもやの正体がわかった気がする。それは、私の心の形とその友人の親切の形が違ったからだと思う。例えば、私の心がパズルの枠で、友人の親切がピース。当時の私はゴミをとりたいたい気持ち（円形の枠）だったけど、友人はみんなのために片付けるといふ親切心（四角形のピース）だったから、う



金賞

まくはまらなかつたんだと思う。

小学校で習った「相手の立場になって考える。」ということ
はとても大切だと思う。だけど、中学生になって思ったことは、
「自分の中で良いと思ってやった親切は、もしかしたら相手か
らしたら親切ではなかったりするのかもしれない。」というこ
とだ。中学生になって先輩後輩などの上下関係ができたり、た
くさんの人との関わりが増えていく中で、自分が良かれと思っ
てやった行動がありがた迷惑と思われるってしまう機会が増えてい
るのかもしれない。

例えば、友人への声かけだ。私が友人のことを思ってたかけた
言葉は、ほとんどの場合、友人の心の枠に私の親切のピースが
はまる。しかし、同じ状況でもはまらないことがある。これは、
友人の心の形が変わることがあるからだ。例えば、私にも同じ
ような経験がある。「ねえ、行こう！」と友人にかけられた言
葉が「Let's go」という意味に聞こえる時や、「Hurry up」と
急かされているように聞こえることがある。この時、私の心の
枠は「急がなきゃ。」という気持ちに影響されて、普段と心の
形を変えている。故に友人が親切にかけてくれた言葉が、変形
してしまった私の心の枠にはまらなくなるのだ。

親切は一方的なものではなく、相手の気持ちや状況に沿う必
要がある。

でも、まずは難しく考えるのではなく、ちりとりを片付けて
くれた友達のように行動することが大事であり、だからこそ考
えて行動する力が身につくのだと思う。少しでも相手の心の形
にあった親切を届けるために、「相手の立場になって考える。」
「相手の心の形を考える。」を大切に過ごしていこうと思う。

小さな親切、大きなお世話

静岡市立清水第八中学校 三年

高田 莉彩

私は今、福祉専門副委員長をやっている。使わなくなった子
供服の回収、募金など、小さな親切と思われる活動が主な仕事
だ。私たちの活動が、誰かのためになってくれる事を願い、日々
活動している。

しかし先日のテレビで、目を疑いたくなるような光景を見た。
南米チリ北部に広がるアタカマ砂漠の居住地域を抜けた先に、
膨大な量の衣服が捨てられ、巨大な服の山ができていた。世界
各地で売れ残った商品や古着が大量に送られ、衣服の墓場のよ

うになっていたのだ。善意の寄付という形で送られたはずの古着が、途上国で捨てられている真実を知り、私はとてもショックを受けた。もしかしたら私たちの活動も、小さな親切ではなく、大きなお世話だったのかもしれないと、とてつもない不安に襲われた。

「小さな親切、大きなお世話」

この言葉の通り、親切がいつも相手の為になるとは限らない。そんな厳しい現実を、目の当たりにした出来事だった。私はふと、親切と自己満足の境界線が頭をよぎった。親切とは、相手の為になった時、初めてそう呼べる。善意の押し売りになってしまった時、それは単なる自己満足に過ぎないのではないか。古着のリサイクルも、活動そのものに満足するのではなく、適切なルートで、適切な場所へ運ばれているか、などを確認する必要があると深く反省した。

親切な行動と聞くと、よく席の譲り合いの話が出てくる。お年寄りや身体の不自由な人に席を譲る事は、とても勇気が必要だし、素敵な事だと思う。その一方で、席を譲られた側の気分を害してしまった件も、実際少なくないようだ。これは、どちらが悪いという話ではなく、双方の思いが一致しなかっただけで、仕方ない事だと思う。相手を思いやる気持ちと、それを受けとる気持ちが合致した時、初めて親切は成り立つ。だから

こそ、親切は難しい。

しかし難しいからと言って、親切から目を背けていてはもったいない。私が重い物を持っている時、半分持ってくれる友達がいいたら、私だったらやっぱり嬉しい。私が傷付いてくじけそうになった時、「大丈夫」と声をかけてもらえたら、私ならきつと元気が出る。相手の状況に気付く事ができた時、初めて相手の立場になって考えられる。相手がどう思うかわからないけれど、相手を思いやり「気付く」気持ちがないと始まらない。だから私は、その「気付く」気持ちを大切にしたい。そんな気付きの連鎖の先に、親切は広がっていくと信じている。



銀賞 小学生の部

あったか言葉をつなごう

浜松市立北浜南小学校 四年

鈴木 陽菜

わたしの学校には、「あったか言葉」について考える「あったかハート週間」というものがあります。まわりの人に温かい気持ちでせし、こまっている人には、すすんで声をかけようという週間です。そして、学校では先生や友達と、家では家族と「あったか言葉」について考え、話し合いをします。

二年生の「あったかハート週間」の時のことです。家族で話し合いをしている時にお母さんが言いました。

「買い物に行った時、まい子になってこまっている子を見かけると、どうしてもいつもお母さんがお店の人をよんだり、いっしょに家の人をさがしたりするのか分かる？」

わたしのお母さんは買い物中、まい子を見つけると、必ず声をかけに行きます。わたしはいつもすごいなと思いつつ、知ら

ない人に声をかけるのは、はずかしくないのかなと思っていました。ただ、お母さんは、

「こまっている人がいたら助けてあげたいという気持ちで半分、それとのこりの半分は、お母さん自身がこうかいしたくないから。あの時声をかけておけば良かったと思いたくないから、いつも勇気を出して声をかけているんだよ。」と話してくれました。

こまっている人に声をかけるということは、決めてかんたんなことではありません。とてもきんちょうすることだし、勇気のいることだとわたし自身ずっと感じてきました。

でもお母さんの話を聞いて、少しの勇気でだれかの助けになれるのなら、はずかしいと思う前に、まず行動にうつしてみようと思うようになりました。

三年生になって、クラスが変わり、新しい友達ができたら、体育のじゅ業中、クラスの友達がお茶をこぼしてしまったことがありました。友達はこまった顔をしていて、わたしにはとても不安そうに見えました。わたしはすぐにぞうきんを持って、こぼれたお茶をふきました。いつもだったらすぐに行動にうつせたかは分からないけれど、あの時あの話を聞いたからなのか、ふしぎとすぐに行動にうつすことができました。友達は笑顔で「ありがとう」と言ってくれました。その数日後、わた

しは運動場で転んでしまい、うずくまっていた。すると、「大丈夫？」と声をかけてくれたのは、あの時お茶をこぼしてしまった友達だったのです。声をかけてくれたことがすごうれしかったし、今度はわたしが友達に「ありがとう」と伝えました。

こまっている人に声をかけることも、助けをもとめることもどちらも勇気のいることです。しかし、自分にとってどうかいのない行動、言葉選びをすることによって、たくさんの「ありがとう」が生まれるのではないのでしょうか。これからたくさんの「あつたか言葉」をたくさんの人につないでいきたいです。



協力し合う親切とは

富士市立天間小学校 六年

坪井 優奈

これは、母が私に話してくれた出来事です。私の弟は、とある歯医者さんに通っています。理由は単純で、虫歯の予防をするためです。しかし、弟は、自閉症（言葉が伝わりにくかったりする）障害をもっています。そこで、そういう人たちも安心して、通うことができる歯医者さんに行っています。普通の歯医者さんは、「先生が治りようして終わり。」というような流れですが、弟が通っている歯医者さんは、少し違います。

まず、診察台に座り、先生が、今日のやることが書かれている紙を見せながら、簡易的に説明してくれます。そうすることで、言葉が頭の中に入りやすくなります。そこには、大きな文字やふり仮名、写真やイラストなど、分かりやすいように書かれています。それから治りようを受けますが、本人がいやになっってしまったら、無理をさせずに、次回に回してくれたり、落ち着くまで治りようを待ってくれたりなどと、「歯医者はいわいから行きたくない！」という思いが芽生えないように、か

ん者さんの気持ちに寄りそいながら、対応をしているそうです。

さて、ここからが本題です。先ほどの説明に使う紙、それを誰がつくっているのかというと、すべて先生の手作りです。しかも一人で。そして、写真のさつえいは、看護師さんが行います。写真は、治りように使う道具や自分が治りようを受けている写真です。仮に、看護師さんが十人のかん者さんをさつえいしたら、先生は十人分の紙を作らないといけません。言い忘れていましたが、次回にやることなどの紙を、かん者さんごとに作ることもあるので…そうになると、十枚以上の紙を作ることになります。(先生一人ということをお忘れください。)、そうすると、先生は、かん者さんの治りように紙の作成…なかなか忙しいです。しかし、それでも作り続けるのは、「歯医者さんは怖くない。」と思うように作り続けているのだと、私は思います。母は、

「本人がどこまで治りようをしたか、お互いに分かるから、とっても助かるし、ありがたい。」

と、言っていました。紙を一つ一つ、工夫して、協力し合いながら、作り続けるというところに、お互いに親切があると思いました。

私が言いたいことは、紙の事もそうですが、親切とは、誰か一人が相手のことを思い、行動することであると、この文章を

書く前には思っていました。でも、親切とは、「一人だけで行う。」というだけではなく、何人かの協力や自分のできること、それが一つになって、親切になったりすることもあります。もちろん、『心』で思ったり、考えたりすることも大切ですが、それだけでは、ただ思う、ただ考えるというだけになります。親切とは、行動も大切だということが今回の話で分かりました。

受け取る親切

掛川市立横須賀小学校 六年

横山 七海

夏休みのある日、車のディーラーへ車の修理に家族で行きました。車屋さんでは九十周年のイベント中で来場者の人達がくじ引きをしていました。妹と二人で一回ずつ、くじ引きに参加しました。妹はC賞のジュースが当たり、私はB賞のパスタが当たりました。

「A賞の手持ち花火が良かったな。」

と、つついっし声に出して言っていました。そのまま席に案

内されて向かっていると、後ろから男の人に声をかけられました。

「花火、ほしかったって聞こえたから、良ければ、これどうぞ。」と、ふり向いた私に花火をわたそうとしてくれました。それは、くじ引きで、私のうしろにらんでいた男の人でした。ふだんから、

「知らない人から、物を受け取ってはいけないよ。」

と母に言われているので、受け取っていいのかとまどっていたら、

「いいよ。気にしないで、どうぞ。」

と、その男の人は花火を差し出してきました。私がその人を見ると、少し困ったような、まゆ毛を下げているようにも見えました。結局家族みんなでお礼を言って受け取りました。

帰りの車で、

「ラッキーだったね。」

と妹が言いました。でも私は、本当にこれで良かったのかなと思いましたが、私達は、お礼を言っただけで、何も返せていません。そう思い、少しモヤモヤとした気分になりかけていると母が、
「何かの本で読んだけど、心理学では親切をされた側と親切をした側ってね、親切をした側の人の方が、その後の良い気分で過ごしているんだって。だから、あの男の人も花火をわたして、

スツキリ良い気分で過ごしているかもよ。七海があの人を気分を良くできたという事だね。」

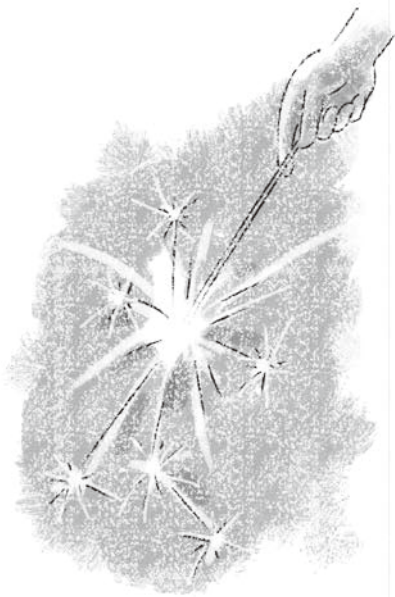
「そうだな。ぜん意は断るよりも、受け取る方がいいな。」と、続けて父が言いました。

それなら、私は気がつかないうちに、ぜん意をぜん意で返したことになります。これは、一つの親切だったかもしれないと思えるようになりました。そして、もう、モヤモヤした気分はなくなりました。スツキリと良い気分です。母の言った、

「親切をした側の人が、その後の良い気分で過ごしている。」

という言葉が頭にうかびます。

このことがあったからなのか、手持ち花火は、いつもよりきれいに見えました。



銀賞

銀賞 中学生の部

小さな親切を当たり前に

静岡市立城内中学校 二年

青島 和

ぼろり。私は登校中、ボーっとしながら駅で電車を待っていると、横を通ったおばあさんが小さい紙のようなものを落とした。それは、切符だった。これがないと、おばあさんは改札口で止められてしまう。拾って届けなければ。そう思うけれども、なかなか行動にうつすことができない。落としているところを見たのは私だけではないし、私以外の人が拾って、おばあさんに届けるということもありうる。勇気が出せないからといって、届けなくていい理由を探してしまう自分がある。

そんなとき、私が小さい頃に心に刻まれた瞬間を思い出した。前に父と電車に乗っていると、座席に切符を落としたまま気づかず、電車を降りようとしたおじいさんがいた。まだ小さかった私は、「どうしよう」と戸惑っていた。でも、そんな戸惑う

私の考えを否定するかのように、すぐに動いた人がいた。それは、心優しい私の父だった。落ちましたと柔らかい声を出しながら切符を拾い、おじいさんに笑顔で差し出す。一瞬の出来事だったけれど、私にとっては父に尊敬の思いが芽生える、とても濃い出来事だった。

私はあのとき、思い立ったら行動するあの父の誠実な対応に、感動したのだった。そんな父のように行動力のある人になりたいて、強く思ったのだった。とりあえず動いてみよう。今動けば、少し大人になれる気がする。深く考えずに、考える前に動いてみよう。自分に言い聞かせながらとった行動は、思っていたより簡単で一瞬の出来事だった。そして返ってきたのは、おばあさんの笑顔と「ありがとう」という言葉だった。切符を落とした人に切符を届ける。今思えば、父もしたこの行動はとても単純で、大きな出来事でもない、小さな親切だったのだ。それなら、動かずに戸惑っているより思い切って動き出した方が、おばあさんの笑顔と「ありがとう」が返ってくるので、良いのではないか。

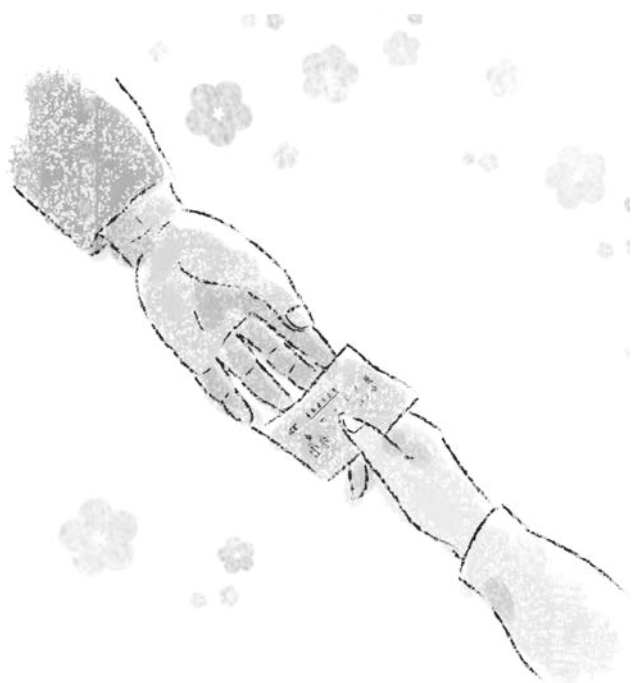
家につき、夕食を食べているとき、父に今日の出来事を話した。

「昔、お父さんは切符を落とした人に届けたことがあったよね。」
そう話すと父は、

「えっ、そんなことあったかな。」

と言ったから、私は驚いた。覚えていないのだろうか。そうだが、父は常に心優しい人だ。落とし物を拾い届けるのが普通である、とても親切な人なのだ。困っている人がいたら知らないふりをせず、声をかける、本当に優しい人なのだ。

私も小さな親切を当たり前にできるようにになりたい。常に父のように、優しく行動力のある人になれるよう、小さな親切を積み重ねていきたい。



思いやりであふれる社会

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

西岡 倫可

私は四月からバスに乗って中学校に通っています。通い慣れた道を友達と話しながら歩いた小学生の時とは違い、静まり返った車内、窓の外には高い建物の数々、行き交う人々の多さ、せわしなく走って行く車…見慣れない風景に毎日が驚きの連続でした。

あわただしい春が過ぎ、入学したころの緊張が少しずつ解けて来た時、私はいつものようにバスを待っていました。するとそこに一人の白い杖をついたおじいさんの姿が目に入りました。その白い杖から私は「目が見えない人かな。」とぼんやり思っていた時、後ろから一人の高校生ぐらいのお姉さんが走って来て、やさしく背中をたたきながら「大丈夫ですか。何かお手伝いする事はありますか。」と声をかけていました。そのおじいさんはびっくりした後、とてもうれしそうな表情をしてお姉さんと歩いて行きました。お姉さんも笑顔でした。私はその光景を見た時、とても温かい気持ちになりました。

私はその後、バスに乗りながら流れる街並みをながめていまし



銀賞

た。すると今まで気付かなかっただけで、「その温かい光景」は日常にあふれている事に気付きました。道をゆずり合っている車、前から来る人に、ぶつからないように端に寄る人、歩行者の横をスピードを落として行く自転車、自転車置き場で倒れている自転車を起こしている人、扉を開けて待っていてくれる人…そんな風景を見ながらバスは私の住む街へ帰って来ました。その時、下校途中の小学生に黄色い旗を持ったおじさんが「お帰り。」と声をかけていました。その時、バスは徐行していました。

私はハッとしました。私が小学生だった時、毎朝登下校中におじさん、おばさんがいて私達を見守っていてくれてあいさつをしてくれた事。事故にあわないようにスピードを落としてくれた運転手の方々。転んだ時にはんそうこうをくれたお姉さん…当たり前の日常にもたくさん親切は自分のすぐそばにあり、私はその親切に支えられて生活していたことに気付きました。

親切とは相手の事を思いやる気持ちなのだとは考えました。お互いの事を尊重し合い、思いやればきっと優しさであふれる素敵な社会になると思います。そんな優しい社会にするために私も出来る事からやってみようと思いました。まずは降りる時にバスの運転手さんに感謝の気持ちをもって「ありがとうございます」とお礼をして。

ベビーカーステラ

静岡市立安倍川中学校 二年

向井 灯里

小学三年生の時、家族と京都を訪れた。市内観光中に、電車を乗り継ぐとしていたときのことだ。駅構内を移動していたら、すれ違った男性のポケットから小さなカードのようなものが落ちたのが見えた。私は、それが何かは分からなかったが指をさしながら、「あの人、なにか落としたよ。」と父に伝えた。すると父はそれを拾うとその男性に向かって「すいませーん。」と、声をかけた。しかし、その男性は急いでいたようで、気づかずに行ってしまった。父はその男性を追いかけて始め、私もそれについていった。

父が改めて男性に声をかけ、それを渡すと、男性はびっくりしたような表情で落とし物を受け取った。父が、「よかった、よかった。」と私に言いながら、私たちはその場を離れた。

私は、その落とし物が何だったのか知りたくて父にたずねた。「定期券だよ。」「ティキケンってなに?」「それがないと電車に乗れないんだよ。」

「テイキケン」。初めて聞いたが、とても大事なもののような気がした。

私たちは駅のホームを歩きながら、次の目的地の話をしていった。その時、「すいませーん。」と後ろから声が聞こえた。振り返ると、「ありがとうございます。本当に助かりました。」と、先ほどの男性が肩で息をしながらやや早口で言った。続いてその男性は、「つまらないものですが。」と言いながら、おもむろに私たちに紙袋を差し出した。私がそれを受け取ると、男性はすぐに去っていった。

その袋の中にはベビーカーカステラが入っていた。私はこれを、駅構内を足早に歩いていたときに、売店で見かけた。「おいしそうだな。欲しいな。」と思ったが、すぐに通り過ぎてしまっていて言い出せなかった。

私は、欲しかったベビーカーカステラが手に入ってうれしかったし、それ以上に、急いでいたのにわざわざ私たちを追いかけてお礼をしに来てくれたことに感動した。それと同時に、見ず知らずの私たちが「テイキケン」を男性に渡した行為が、その人にとっていかに心に響いたのかが伝わってきた。偶然の出来事から生まれた小さな親切だが、相手にとってはとても大切なことだったことが、男性の行動から分かった。

五年ほど経った今でも、その時のベビーカーカステラが一粒だけ

残っている。その男性の気持ちがうれしくて、お菓子の空き箱にしまっておいたのだ。それは変色しカチコチで、当然、食べることはできない。しかし、旅先で見知らぬ人からもらったそれは、私にとって大切な思い出の品となっている。

偶然の気づきからの小さな親切は、相手にとっては大きな意味があった。だから私は、小さなことでも気づいたら臆せずに行動して、たくさんの、周りの人を支えていきたい。

